 <p>Zambia</p>	学校名 : 大田区立六郷中学校	● 実践教科等 : 保健体育
	氏名 : 平田 慶子	● 時間数 : 4時間 ● 対象生徒 : 中学3年生女子3学級 ● 対象人数 : 64人
[担当教科 : 保健体育]		

## 1 単元名 「感染症の予防」

## 2 単元の目標

**ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)**

- ① 感染症について学び、日本や諸外国における感染症予防の課題について調べる(知識・技術)
- ② 感染症についての学びを通して世界中で協力し予防していく時代であることを理解する。未来を予測し、地球上のあらゆる地域の問題が、地球全体の問題に広がることを考える(思考力)
- ③ ザンビアと日本を例に、国際社会が取り組むべき感染症対策について考え発表し、国際協力に対する関心を高める(思考力・表現力・学びに向かう力)

## 3 単元の指導について

### (1)教材観

- ・保健分野では、健康な生活習慣を確立するために、疾病の予防について理解を深めること、自己の生活習慣と疾病予防について課題を発見し、その解決に向けて思考し判断するとともにそれらを表現し実践する力を高めたい。
- ・感染症の予防を原因や、予防3原則について考える。さらに現状を知ることで世界の感染症が他人事ではなく、身近な問題として国際的視野で疾病予防を考えることができる。
- ・感染症の予防だけでなく、感染症にかかった場合の対応や、周囲への感染防止のための処置についても理解を深めていく。

### (2)児童生徒観

- ・3年女子、3クラス(64名)を学期ごと2集団に分けた、男女別の保健体育クラスである。活発で、協調して身体活動を自発的に行うことができる。体力値には、二極化がみられる。
- ・日本と諸外国についての事前アンケートでは、90%の生徒が、外国に対して興味関心を抱いており見聞を広げる、異文化体験を希望している。アフリカの国々に対しては途上国であり、自然が多い、衛生状態が悪く貧富の差がある、紛争が絶えないなどのイメージが多く挙げられている。途上国に対し、日本が平和である幸福感を述べている生徒も多い。
- ・「健康と環境」については、2学年の保健分野で履修済であるが、内容の定着が十分でない生徒もいるため、感染症の予防では、環境問題を復習し関連付けて考える内容とした。
- ・感染症については身近で発症している疾病については、興味関心をもっており、意見交換も活発に行われる。20年ほど前の感染症の授業とは「エイズ」に対する関心度が下がっていると感じる。

### (3)指導観

- ・「感染症の予防」「性感染症の予防」「エイズの予防」の単元では、病気の特徴をICT活用して調べ学習を行いワークシートにまとめる。
- ・教科書、資料より予防3原則を学ぶ。エイズについて病気の理解はしても他人事と感じている生徒が多いので、アフリカの実態をパワーポイントやJICAの資料とフォトランゲージで示す。
- ・感染症についてグループで調べたことを伝え合いSDGsの観点から必要と思われる予防方法を話し合い、アイコンを使ったポスターを作成し、発表する。
- ・他のグループの発表を聞いて、病気の予防のためには世界中で明確な目標達成に取り組むことが必要であることに気付かせたい。

#### 4 評価規準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断	技能	知識・理解
評価規準	感染症の予防方法をSDGsの視点で話し合い、意見交換に参加している。活発に意見を述べている。	得た情報を自己の生活と関連付けて自他の課題を発見する。	ワークシートに自己の意見を伝えやすくまとめ、積極的に発表する。	感染症、性感染症の特徴や予防3原則を理解する。
評価方法	ワークシート 観察	ワークシート ノート	発表	ノート

#### 5 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
	事前アンケート	諸外国に対するイメージや自分の思いに気付く。	ユニセフの資料を活用し、諸外国に対する自分の考えをまとめる。
1	感染症と病原体	予防3原則をもとに、身近な感染症の予防方法を考える。	インフルエンザやノロウィルスを例にあげ、感染経路を考え、自己の生活における課題を発見する。
2	性感染症の予防	性感染症の感染の現状から健康を守るための方法を考える。	教材から、性感染症の増加傾向と低年齢化の実態について解決方法を話し合う。性感染症の特徴から自己管理の大切さを学ぶ。
3	エイズの予防	HIV感染についての情報を収集し、感染症予防の重要性に気付く。	ICTを活用し、世界中のエイズの現状を調べる。アフリカの実態から国際的視野に立ったエイズの予防について考える。
4	SDGsの視点で感染症の予防方法を考えよう	既習の感染症対策を、国際的視野で予防方法を考える	SDGsの内容と、予防方法として有効な事項を結び付け、世界中の感染症予防を考える。

※2学年では「健康と環境」の単元で、水、廃棄物について、日本とザンビアの現状を比較して、課題を発見し、その解決に向けて思考を深めていく学習を行った。

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
	事前アンケート	諸外国に対するイメージや自分の思いに気付く。	ユニセフの資料を活用し、諸外国に対する自分の考えをまとめる。
3	衛生的な飲料水の供給	生命維持や健康な生活に欠かせない水の重要性を知り、自分の生活を振り返る。	衛生的な水の確保と管理の仕組みを資料から学び、処理方法について理解する。生活に必要な水量について話し合い、適切な使い方を考える。
5	し尿とごみの処理	廃棄物が自然環境と関わっていることを理解し、自分の生活を振り返る。	生活で生じる廃棄物、生活排水の行方を話し合い、個人でできる取り組みをグループで検討する。
6	私たちの生活と環境問題	環境への個人の取り組みが、自然環境の保全につながることを事例から考える。	自然環境の汚染について、発生している事例を調べる。グループで汚染を防ぐための方法を考える。

## 6 授業事例の紹介

小単元名【SDGsの視点で感染症の予防方法を考えよう】

### (1) 指導案

(ア)実施日時 12月13日(木)第3限

(イ)実施会場 第2総合学習教室

(ウ)本時の目標

感染症についての予防方法を、SDGsとともに考える

(エ)指導のポイント

前時までの授業を参考に、予防方法を考えSDGsの項目と重ね合わせて考えさせる

様々な角度から生活を見直し、予防方法が発見できるよう話し合いのヒントを投げかける

### (オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	1 前時までの振り返り	・ 感染症予防を世界規模で考える時代であることを理解する	講義		
展開 40分	2 タブレットを配布しSDGsとの関連を調べる	・ ICTを活用し自分が取り上げた感染症予防がSDGsとどう関わっているか考える	個人	・ 机間指導を行い様々な視点があることに気付かせる	・個人のまとめプリント(思考・判断)
	3 グループで予防方法を共有し発表準備を行う	・ グループになり自分の考えをグループ内で発表する ・ グループで出された考えをまとめてアイコンを貼り予防方法を書き、SDGsとの関連を話し合う	グループ	・ グループで出された意見をカテゴリに分けてまとめていくよう支援する (グループ分けは項目または病名)	・グループの発表ポスター
	4 グループごと発表する	・ グループごと発表する	発表	・ 発表する、発表を聞く態度を指導する	
まとめ 5分	5 各グループの視点を振り返る	・ まとめを聞いて感想を書く	個人		・発表を聞いてのまとめプリント(知識・理解)

### (2) 授業の振り返り

調べる



共有する



発表する



【良かった点】

・調べ学習は、ICTを活用し、例を示すことで全員が同じ内容で取り組むことができ、ワークシートの未完成者がなくグループワークに取り組めた。グループでは、SDGをツールとして、感染症の予防方法と関連付けて考え、共有することができ、感染症の予防を自分事としてとらえていた感想が多かった。

・SDGsのアイコンと、ユニセフの資料を事前に活用したことで、視点が絞りやすく、話し合い活動が活発化した。

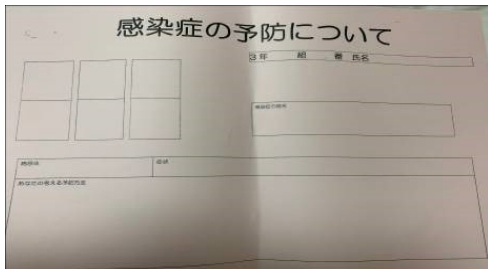
【改善点】

・生徒一人一人の調べ学習に、深まりの差ができてしまった。ヒントカードを2種類ではなく作成の手順を入れたものを加えるなど工夫が必要である。

・感染症の疾病ごとにグループを作ったが、病気の種類が多く共有に時間がかかってしまった。病気の種類を絞り、予防方法の視点を広げる時間を拡大していきたい。

(3) 使用教材

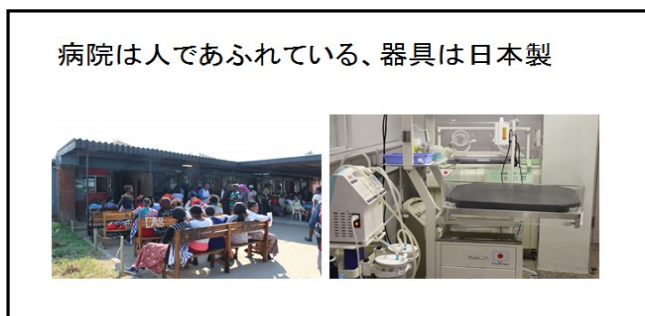
発表用ポスター



ポスター用アイコン



パワーポイント



- ・中学校 保健体育 (大修館書店)
- ・中学 保体資料ノート 3年 (正進社)
- ・ワークシート
- ・未来を変える目標 SDGsアイデアブック Think the Earth (紀伊國屋書店)
- ・私たちがつくる 持続可能な世界 (外務省・UNICEF)
- ・国際理解教育 実践資料集 (JICA地球ひろば)

(4)参考資料等

- ・SDGs持続可能な開発のための2030アジェンダ（外務省）
- ・いのち、輝け 一途上国の健康を守るためにー（JICA地球ひろば）
- ・SDGs 2030年までのゴール（みくに出版）
- ・2030SDGsで変える（朝日新聞）
- ・性の健康（性の健康医学財団）
- ・教職員のための指導の手引き ～up date！エイズ性感染症～（日本学校保健会）
- ・環境とつきあう50話 森住明弘（岩波書店）
- ・だれでもできる地球を守る3R大作戦 山本耕平（合同出版）
- ・環境問題入門 山岡寛人（旬報社）

7 単元をとおした児童生徒の反応/変容

★授業前半は、インフルエンザやノロウィルスのような身近な感染症についての予防に関する意見が多かった。ザンビアの中学生の生活と比較して考えてからは、エイズやコレラを取り上げ、予防について考え、「自分も世界も」と視点が広がっている。

(ワークシートの感想より)

- ・自分の知らない感染症があり、学ばなければ予防できないと思った。
- ・感染症について、他人事だとは思わずしっかりと予防しようと思った。そのために正しい知識を学びたい。
- ・「貧困をなくす」大切だと思いました。世界中の人々が同じ治療、予防をすることが感染症撲滅の第一歩だと思いました。
- ・日本とザンビアの違いを知り、興味をもちました。
- ・今までは自分が気を付ければよいと思っていたが、調べ学習をして世界中で目標をもって取り組まなければならないことがわかった。
- ・日本だけが良いのでは感染症は防げない。技術を他国に導入し、予防を呼びかけるなど防げる感染症で命をおとさないよう、世界で協力すべきだと思った。
- ・デング熱が流行したときも軽く考えていただけでした。自分には関係ないと思ってはいけないと今回の授業で思いました。

★SDGsを発表のツールとして取り入れたこと、パワーポイントを使用して同じ年代の異国文化を視覚でとらえたことにより、国際的視点が開かれ、国際協力に関心が高まっている。

(ワークシートの感想より)

- ・エイズは、アフリカだけの問題ではなく世界中の問題である。私たちに何ができるか考えてみたい。
- ・SDGsに関連付けると、しっかりと目標が立てられることもわかった。
- ・グローバル化が進む中これから先はより積極的に海外と関わっていくことで理解を深めていくことが大切だと感じました。
- ・支援する団体があることがわかった。私も参加していろいろな国の支援をしながら友情の輪を広げたい。孤児が少しでも減るようなことをしたい。
- ・いろいろな国が助けたり、助けられたりすることで状況を変えられるのではと思う。
- ・募金やボランティアなどもっと積極的になろうと思う。
- ・知らない国のことを知るのは楽しくてもっといろいろな国のことを知りたくくなりました。

★感染症の予防には、環境と教育が深く関連していることをあげた班が多かった。水の衛生が重要と気付く記述が多かった。

(ワークシートの感想より)

- ・どの感染症も、水がきれいなことと、世界の人々が協力することが大切だと思った。
- ・日本は水や電気に恵まれている、そして清潔な環境にあるのだと改めて思った。
- ・日本は地域によって大きな差はなく、みんなが教育や生活が守られているから、感染症の予防もできているのだと思った。
- ・世界中の子どもが学校で授業を受けられる環境作りが予防には必要だと思った。



## 8 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

### 【成果】

・事前アンケートにおいて、他国への関心は欧米国、韓国に対する異文化体験の興味関心が高かった。授業後は、途上国への国際協力の関心が高まった。

・SDGsアイコンを利用し示すことで、世界中が目指す目標について具体的概念を意識して話し合い活動ができるようになった。

・感染症の予防や性感染症の予防を自分事としてとらえる記述が多くみられる。

### 【課題】

・校内における研修が、学年内であった。教科をこえた授業実践に至らなかった。

・1学年の単元や体育分野に国際理解教育を意図的に取り入れていない。

### 【課題の改善策】

・次年度以降、校内研修や公開講座で国際理解教育、SDGsをツールとしたテーマを提案する。

・1学年の単元や総合でSDGsを導入に取り入れ授業展開の計画を立案する。

## 9 教師海外研修に参加して

・研修への応募動機は、感染症の授業、特に性感染症やエイズの授業の活性化のため、アフリカの実際を見聞し教材化して生徒の関心、意欲を高めるためであった。また、低年齢での妊娠、出産の現状がもたらすリスクや改善方法をインタビューして生徒指導に役立てたいと思っていた。訪問先で見たもの、聞いたことは活きた資料となった。JICA ザンビア次長より、ザンビアの一面だけでなく、掘り下げて多面的な捉え方をし、熱いうちに実践することをお話いただき、アンテナをより高くすることでより研修が深まった。

・国際協力に対する考え方は、この研修で大きく変容した。これは、生徒の感想にもあったが「募金」「経済的援助」が義務と思っていたが、技術支援やKAIZENの支援、また、日本が一方向的に支援するのではなくSDGsの目指すところ、先進国も途上国も共に目指す開発課題に取り組むと考えた。

・異文化体験としてチテンゲの利用方法を考える時間では、日常見せない生徒の姿が印象的だった。

・研修中は自分の準備不足や不勉強さを感じる日々だった。現地で活動するJICA協力隊員やJICA職員の方々の、草の根活動がとても印象的だった。今の自分にできることを考え、次世代の働き手を教育するうえで世界に目を向け、教科書ではなく、「今の世界」を教科の中でつなげていく重要性をととも感じた。ザンビアという国で安全に無事研修を終えることができた感謝の気持ちでいっぱいです。

